

東洋大学附属図書館蔵「は、き木」私見

——紀州家旧蔵伝阿仏尼等筆源氏物語の研究——

成田 大知

一、緒言

東洋大学附属図書館に、阿仏尼筆と伝えられる『源氏物語』「は、き木」一帖を蔵する（以下、東洋大本）。

この本は、昭和初期に佚亡したとされる『源氏物語』の古写本、「紀州家旧蔵伝阿仏尼筆」本（以下、紀州家本）の零本と目される一帖である。

紀州家本とは、伝阿仏尼筆とされる鎌倉時代写の五十四帖揃本の『源氏物語』で、紀州家の旧蔵にかかる写本を言う。

池田亀鑑による『源氏物語』の本文系統の三分類、すなわち青表紙本系、河内本系、別本のうちの別本とされており、現在通行の『源氏物語』の本文とは異なる珍しい本文を多く有

する本として知られていた。

しかし、紀州家本は、『源氏物語』の本文研究上、非常に貴重な本でありながら、後述するように、昭和初期、紀州家から売り立てに出され、インド人貿易商モディ（Narain Hornusji Mody 一八七一―一九四四）の手に帰して以降、行方不明となっている。その本文は、池田亀鑑『校異源氏物語』、『源氏物語大成 校異篇』にも登載されておらず、全様を知ることはできない。わずかに、かつて武田祐吉が紀州家本を実見して、その本文を金子元臣『本定源氏物語新解』（全三巻。明治書院、大正十四―昭和五年。以下、『新解』）に校合した書入校合本、すなわち「武田校本」と、山岸徳平がそれを借覧して何らかの活字本に転写したとされる、すなわち「山岸校本」^③とがあつたが、それらの校合本も所在不明とな

っている⁽⁴⁾。今となつては、わずかに山岸徳平『尾州家本源氏物語開題』（徳川黎明会、昭和十年。以下、「開題」）や、島津久基『説源氏物語講話』（全五巻。中興館、昭和七・十七年。以下、「講話」。但し、紀州家本の引用は二巻（昭和十一年）以降）、そして山岸徳平校注『日本古典文学大系 源氏物語』（全五巻。岩波書店、昭和三十三・三十八年。以下、「旧大系源氏」）などに部分的に引かれた箇所によって、その本文を窺うばかりである。紀州家本はまさに、幻の伝本と言える写本なのである。

東洋大本は、その紀州家本の帚木巻である蓋然性が極めて高い。東洋大本が紀州家本帚木巻であることが明らかになれば、それを通して紀州家本の全体像について考えることも可能となるであろう。東洋大本の解明は、延いては紀州家本の解明に繋がるものと考ええる。

二、東洋大本の概要

東洋大本は、昭和四十一年、当時東洋大学教授であった石田穰二によって、東洋大学内向けの広報誌「図書館ニュース No.2 貴重書室から」に紹介された。以下に、その記事を転

載する⁽⁵⁾。

本書は、鎌倉時代中期の古写本。本文はきわめて純度の高い青表紙本系統である。縦十五・四センチ、横十五・八センチ、斐紙、綴葉装、墨付六十一枚、巻頭に白紙一枚、巻末に白紙二枚を置く。紀州徳川家に伝来したもので、上掛けの白紙に「阿仏筆源氏物語／伏見宮安宮照子殿下明暦三年十一月廿六日／紀伊中納言光貞卿へ御降嫁之節御持込」と三行に墨書されている。金で模様を刷いた薄茶の絹表紙の装幀はこの時のものであろうか。光貞は紀州徳川家の祖頼宣の嗣である。この伝阿仏尼筆の紀州家旧蔵本は、山岸徳平博士の「尾州家河内本源氏物語開題」（昭和十年刊）に、部分的に校合に使用されているが、それは当時英人モーデ氏（神戸市在住）の許に在って博士は直接見ることを得ず、大正十五年夏秋の候、佐々木信綱・武田祐吉両博士が紀州徳川家に就いて校合されたものを借覧されたよしである。その後の消息は不明で、池田亀鑑博士の「校異源氏物語」にも登載されていない。もとは五十四帖全部完備したものであったはずであるが、そのうち帚木の巻だけが本年五月の古書展に姿を現わし、吉田幸一博士の御尽力によって本学の蔵に

帰した。本書について述ぶべきことは多いが、その一二に触れる。巻末、墨付六十一葉目の次に二枚の白紙を存することは前に述べたが、その中間、つまり二枚の白紙の前の四枚の紙が切り取られていて、今ない。その部分には奥入（青表紙本を書写した、ないしは書写せしめた定家の注）⁶が書写されていたと考えられる。写真に見られる巻頭の朱の蔵書印は、「賜架書」とまでは読めて以下不明であるが、「賜架書屋蔵」とあるべく、徳川頼倫侯の南葵文庫に長く在った書誌学者高本文の蔵書印である。本書の外箱右下に貼付されている蔵書ラベルは同氏のものである。本書は南葵文庫の東大移管後も紀州家にあり、その後の整理に際して高木氏の有に帰したものと考えられる。英人モーデ氏の手に移ったというのはその後のことであろう。紀州家旧蔵本は桐壺の巻はか数帖に特異の本文を有したものとくであるが、その行方は今は知るに由ない（記述中、吉田幸一博士の御教示にあらずかった部分がある。記して謝意を表す）。

紀州家本の伝来については、山岸徳平が、徳川家康から御三家に譲られた、いわゆる「駿河御譲本」であるとしていた⁶が、東洋大本の上掛け紙に墨書された来歴には、「阿仏筆源

氏物語／伏見宮安宮照子殿下明暦三年十一月廿六日／紀伊中納言光貞卿へ御降嫁之節御持込⁷」とあって、紀州家本は、明暦三（一六五七）年、伏見宮家の王女安宮照子（寛永二（一六二五）年）⁷が紀州家二代当主徳川光貞（寛永二（一六二五）年）に降嫁の折に、持参された本であったことになる。東洋大本が紀州家本帚木巻であるとなると、紀州家本は伏見宮家より齎された本であった。

紀州家本が伏見宮家から齎されたという説は、久保木秀夫『源氏物語』紀州徳川家旧蔵本の行方（『中古文学』第八五巻、平成二十二年六月。以下、「行方」）に紹介された、紀州家私設図書館南葵文庫の主事、高本文の証言によって裏付けられる。

もう一つ有名な源氏に紀州徳川家蔵の阿仏源氏といふのがあつた、全帖揃本で洵に保存がよく綺麗なものであつた。此源氏は古く伏見宮家の御蔵本であつた由で昭和の初めに道具と共に売払はれたのを、稀らしくも某印度人が購入した。其後英国に渡つたと報道されたが（重要美術の法令が間もなく出た）どうも日本に在るらしい。此源氏は紀州家に在る頃校合して見ると内容が大分異ふので珍らしいといふので校訂して刊行することになつて、

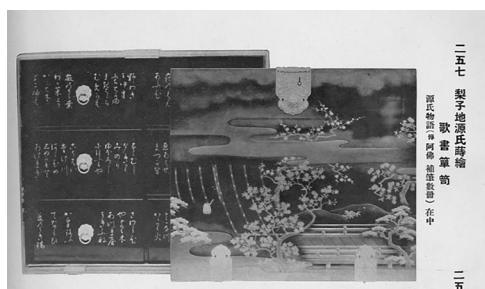
某氏（今は博士）がされてゐたが、其校訂中に売却されることになったので欠本を明かにして入札に出してしまつた。

（「賜架書屋隨筆」、「書物展望」第五卷第八号、昭和十年八月）

伏見宮家伝来という伝えの一致からすれば、東洋大本がその、紀州徳川家蔵の「阿仏筆源氏物語」の一帖であつた蓋然性が出てくる。

久保木氏の調査によれば、「昭和の初め」、昭和二年四月の「紀州徳川家蔵品展観」に、紀州家本を中に収める「梨子地源氏時絵歌書筆筒」【写真1】が出品され、それを時絵蒐集家でもあつたモディ（石田紹介における「英人モーデ氏」と同一人物）が落札し、時絵筆筒とそこに収められていた紀州家本とが彼の有に帰したと言ふ。

久保木氏は、高木の証言にある、紀州家本を校訂したという「某氏」について、学位取得の時期などから、「武田祐吉のことか」と推定し、さらに高木文編『紀州徳川家蔵品展観目録』（昭和二年三月）の「梨子地源氏時絵歌書筆筒」に附された注記「伝阿仏（補筆数冊）在中」が、「欠本を明かにして入札に出してしまつた」という高木の証言に重なること



【写真1】右 紀州家本を収める「梨子地源氏時絵歌書筆筒」
左『紀州徳川家蔵品展観目録』

を指摘し、「展観」以降、東洋大本が東洋大学附属図書館の
有に帰すまでの経緯について、次のように推定している。

武田祐吉に擬せられる人物による校訂の最中、紀州家本の
展観出品が決定した。校訂に使用中であつた数帖については、
そのとき拵えた補写本（『展観目録』の注記にある、「補筆数
冊」）で代替。モデイのもとに渡らなかつた数帖、少なくとも
も帯木巻一帖は高木のもとに返却され（このとき、高木の蔵
書印「賜架書屋蔵」が捺されたのであろう）、その後年月を
経て、東洋大学附属図書館の蔵するところとなつた、とい
うものである。

また、紀州家本の殆どの帖は、モデイの死後、彼の他の蒐
集品と共に敵性資産を管理していた住友銀行によつて神戸の
森本倉庫に移され、昭和二十年の神戸大空襲によつて灰燼に
帰した蓋然性が高い、としている。モデイのもとにあつた紀
州家本の残存は殆ど望めない。その点で、東洋大本が紀州家
本帯木巻であるとすれば、東洋大本はその貴重な残存資料と
いうことになる。

東洋大本を紀州家本帯木巻と同定する意見が多い中で、後
述するように、大内英範「高木本（伝阿仏尼筆帯木巻）」とそ
の本文」（『源氏物語 鎌倉期本文の研究』所収。初出は『中

古文学』七五号、平成十七年）によつて、その本文が紀州家
本帯木巻の本文として『講語』や『旧大系源氏』に引用され
ているものと一致しない、紀州家本が別本とされていること
と矛盾する、等の疑義が呈されている。

また東洋大本の筆蹟についても、久保木氏が紹介した、植
松安「源氏物語の書誌」（『国語と国文学』第二巻第十号、大
正十四年十月）に掲出される紀州家本の書誌によつて、本文
は、阿仏尼、冷泉為相、二条為親、外題は、尊朝法親王と、
その筆者名が知られたが、はたして東洋大本の本文と外題の
筆蹟はそれらに合致するものかどうか、検証は未だなされて
いない。

本稿では、以上の諸点を再検証し、東洋大本が紀州家本
木巻と同定し得るかどうか、いささか私見を述べてみたい。

三、東洋大本の伝来と本文

大内氏は、東洋大本を紀州家本帯木巻と同定することに慎
重な態度を示している。

氏は次の三つの問題点から、東洋大本を紀州家本帯木巻と
同一視することに疑義を呈した。

一、東洋大本の伝来過程と、紀州家本の伝来過程との不整合。
 二、東洋大本の本文と、『講話』、『旧大系源氏』の引用する
 紀州家本常木巻の本文との不整合。

三、東洋大本の本文系統と、紀州家本の本文系統との不整合。
 まず、一の問題について。大内氏は石田紹介に記される紀
 州家本および東洋大本の伝来の過程を次の六項に纏める。大
 内氏論文より転載する。

A・紀州徳川家に伝来したもの

B・南葵文庫の東大移管後も紀州家にあり、その後の整
 理に際して高木氏の有に帰した

C・英人モーデの許に移ったのはその後のこと

D・もとは五四帖全部完備したものであったはずである
 が、そのうち常木の巻だけが古書展に出て、東洋大学蔵
 となった

E・大正一五年、紀州徳川家にて佐々木信綱・武田祐吉
 により校合された

F・山岸徳平「尾州家河内本源氏物語開題」で校合に使
 用されているのは、佐々木・武田校合本を借覧したもの
 紀州家本の伝来について、石田紹介に拠れば、紀州家↓高木
 ↓モーディという過程が考えられる。しかし大内氏は、紀州家

本の伝来過程をめぐって、石田紹介と、山岸の証言、

本文中、伝阿仏尼筆と記したのは、紀州徳川家旧蔵本で
 ある。今、他に転じて実物を見るを得なかったが、幸、
 大正十五年夏秋の候、佐々木信綱、武田祐吉両博士が、
 紀州徳川家に就いて校合を完了せられた。両博士の好意
 によつて、その校合本を借覧してこゝに掲げ得たのであ
 る。

〔開題〕「凡例」

紀州徳川家の売立てがあつた時、即ち大正十四年秋頃、
 伝阿仏尼筆本は同家を出て、英国籍のインド人で、普通
 にはモーデさんと呼ばれた人の有に帰した。

〔高松宮蔵
 河内本〕源氏物語〔解説〕

とが齟齬することを指摘した。⁹⁾ 山岸の言に拠れば、紀州家本
 は、紀州家から直接モーディのもとに渡ったとしか考えられず、
 その間に、高木の蔵にかかる時期があつたとは考えられない
 としたのである。そのため、高木の「賜架書屋蔵」という蔵
 書印が捺される東洋大本は、「紀州家旧蔵本」の一部なので
 はなく、まったく別の伝来をもった本だという可能性が高
 い」と、結論づけた。

たしかに、山岸の証言を見ると、高木に関することには一

切触れられておらず、大内氏が右のような疑問を抱いたことも理解できる。しかしながら、二章に示した久保木氏の推測に従うならば、その疑義も解消できるものと考ええる。

すなわち、武田祐吉に擬せられる人物による校訂の最中、紀州家本とそれを収める「梨子地源氏蒔絵歌書筆筭」の「展観」出品が決定。校訂に使用されていた数帖については、落札者であるモデイのもとには渡らず、校訂後、高木に返却されて氏の有に帰した。そして年月を経て、東洋大学附属図書館の蔵するところとなった。以上のような伝来過程を考えれば、帯木巻を含む紀州家本数帖が高木の蔵書であった時期があったと考えられるのである。これによれば、石田の、紀州家↓高木↓モデイという伝来についての推測は誤りであったこととなる。大内氏は、紀州家本が五十四帖揃で紀州家よりモデイに渡り、その間に高木の蔵であった時期は無いと考えた。そのため、高木の蔵書であった東洋大本は、紀州家本帯木巻ではないと判断したのであろう。しかしながら、紀州家本は、モデイと高木のもとにそれぞれ別に伝来したものと考えるべきなのではなからうか。

久保木氏の指摘が事実であったとすれば、東洋大本は紀州家本帯木巻であったと十分に考えられるのである。以上に

って紀州家本の伝来過程をめぐる大内氏の疑義は解消され得ると思われる。

したがって本稿では、二および三の問題について考察する。まず、二の、東洋大本の本文と、『講話』および『旧大系源氏』所引の紀州家本帯木巻の本文との不整合について。

大内氏は、『講話』および『旧大系源氏』所引の紀州家本帯木巻の本文十二箇所と、当該箇所東洋大本の本文とを比較し、そのうちの七箇所を「問題のある箇所」として考察している。以下が、その「問題のある箇所」である。大内氏論文より転載する。「・」は補入を表す。なお、転載に際し、私に番号をふり直し、頁数などの表記を改めた。

＊『旧大系源氏』および『講話』所引本文（頁）―東洋大本の本文（丁行）

一、（その思ひいで、うらめしきふしあらざらんや。あしくもよくも）（『旧大系源氏』六七）―その思出うらめしきふしあらざらんやあしくもよくも（一五ウ二）

二、例も（『講話』二七）―れいは（三九ウ三）

三、人ぢかならんなん（『講話』三六）―ひとぢかならんなん（四〇ウ二）

四、心もなくては（『講話』五九）——心も・なくては

*「も」は「の」を削除して上書き。（四二〇三）

五、いり（『講話』一一九）——いり *ミセケチにして

ミセケチ符合を削除。（五二〇四）

六、かほけさやかに（『講話』一一九）——か^ほ・けさやか

に（五二〇三）

七、の給ひてん（『旧大系源氏』一〇〇）——のたまひ^て

む（五三〇三）

一について、東洋大本では、（一）内の本文が本行とは別筆の補入で書かれているにもかかわらず、『旧大系源氏』は、別筆の補入であることについて触れていない。このことから大内氏は、「紀州家旧蔵本」には本行に当該本文があったということであろうか」と、東洋大本と紀州家本帯木巻とが別の本である蓋然性を指摘する。一方、「仮に『紀州家旧蔵本』と高木本（引用者注 東洋大本）が同一の写本であった場合、『旧大系源氏』が「武田校本」を用いたと仮定して、「佐佐木・武田校合本（引用者注 「武田校本」）が本行に補入を反映させた形で校合していたということになるのであるうか」とも述べて、「武田校本」が補入を本行に反映させて校合した蓋然性も指摘している。

また、一、三、四、五、七について、「紀州家旧蔵本」と高木本との親近性を示す例もあるが、「三を除いて「いずれも訂正が絡んでおり、校合本の校合方針が明らかでない以上、両者が同一であるという証拠としては不十分であると考え」と言う。（なお大内氏は、三について、単なる表記の違い故か、言及していない。）

大内氏は、東洋大本における補入やミセケチが、『講話』や『旧大系源氏』において触れられていないことから、東洋大本を紀州家本帯木巻と同定することには消極的である。しかし、大内氏が「問題のある箇所」とする右の七箇所のうち二を除く六箇所は、いずれも『講話』や『旧大系源氏』の用いた本文資料が、すでに補入やミセケチを反映させていたものであったと考えれば、特段問題ないものと考えられるであろう。（大内氏は、六についても言及していないが、六についても、同様のことが考えられる。）補入やミセケチの詳細が『講話』や『旧大系源氏』に触れられていないからと言って、それが東洋大本を紀州家本帯木巻とすることへの強い否定的根拠とはなり得ないと考える。

唯一、二だけが、東洋大本と紀州家本帯木巻とで明らかに異同を示している箇所である。

この箇所、『講話』では次のように書かれている。

○然かし。例も忌み給ふ方なりけり。(本文)

諸本中、「例も」とする一群と、「例は」とする一群と両様ある。これは青表紙と河内本との差異には直接は関係ぬやうで、河内本系の河海抄は「は」なのに、花鳥餘情は「も」であり、尾州家本も「も」である。尾州家本と同系統の有栖川宮家本・七毫源氏本及び同じく河内本の平瀬本等の諸本も皆「も」である。従一位麗子本系の紀州家旧蔵本も亦「も」である。…… (第二卷)

東洋大本では「れいは」となっている箇所が、「紀州家旧蔵本」と高木本に異同のあることを示す例であり、両者が別の本だという証左になり得る箇所」と指摘する。しかし氏自らも、「ただし佐佐木・武田校合本は『新解』を用いたとのことであるので、校合漏れによって『新解』の「例も」がそのまま残ってしまった可能性は否定できない」と、その蓋然性を指摘するように、こども『講話』が依拠した本文資料における校合漏れに起因した異同であると考えれば問題は解決できよう。

大内氏は、『講話』が紀州家本の本文を「武田校本」に拠

ったと考えているものようである。だが、『講話』が依拠した本文資料については、山岸に次のような証言がある。

先生(引用者注 島津久基)が、源氏物語講話の執筆に着手せられた頃以来、頑健とは申しがたい先生に私は、出来るだけの奉仕をしようと思った。尾張徳川家の河内本や、東山文庫本や、同文庫の七毫源氏や、伝阿仏尼筆(紀州徳川家旧蔵)本などに関する事や、四辻善成の珊瑚秘抄や、高松宮家本など、自分の手で都合の出来るものを、先生の御言葉に従って、その都度、便宜を計るようにした。

〔源氏物語の思出〕、『日本古典文学大系』月報9、

昭和三十三年一月)

島津の『講話』執筆にあたって、諸本、注釈書の類の資料は、山岸が用意していたのである。紀州家本の本文も、山岸より提供されていたに違いない。山岸がどのような形で島津に紀州家本の本文を提供していたのかは不明である。しかし、二の箇所が、『新解』では、「例も」となっているのを見ると、それを山岸が「例は」と校合し損ねて、書き落としたまま島津に提供した蓋然性も考えられる。山岸提供の本文資料における校合漏れが原因となって、二のような異同が生じてしま

つたと考えれば、問題は十分に解決されるであろう。^⑩

以上、大内氏が「問題のある箇所」とした七箇所はいずれも、『講話』や『旧大系源氏』が依った本文資料の問題に起因したものと考えられる。

したがって東洋大本と、『講話』、『旧大系源氏』所引本文との異同は、東洋大本が紀州家本帯木巻であることを否定する根拠とはなり得ないものと考えられるのである。

次に、三の、東洋大本の本文系統と、紀州家本の本文系統との不整合について。

大内氏は、如上の問題について指摘した後、さらに「いづれにせよ、『紀州家旧蔵本』と、同一視してこの高木本を論ずることには慎重であるべきである」と言い、山岸徳平、島津久基、池田亀鑑三氏の紀州家本の本文系統についての見解を掲げる。

河内本系・青表紙本系の何れにも属さない、第三系列中に分類せらるべき古写本、
（『開題』）

それから河内本の校定に参考せられた八本の一である従一位麗子本（注略）も伝写せられてゐることが知られて来、又、伝阿仏尼筆（注略）の紀州徳川家旧蔵本も、内

容からすれば恐らくその系統に属するものと推定し得られる。
（『講話』第二巻）

鎌倉時代の中ごろ、当時の学者や文人達が分担して書いたもので、非常にめづらしい系統のものであつた。

（『本のゆくへ』）

これらのいずれも、紀州家本が、「河内本系・青表紙本系の何れにも属さない」「非常にめづらしい系統」の本文、いわゆる別本の本文であるとする見解をもとに、「そうした評価と高木本の本文とを結び付けることには現段階では慎重でなければならぬ」と言う。

なぜなら、東洋大本は、石田によつて「きわめて純度の高い青表紙本系統である」とされているからである。大内氏は、この本文系統をめぐる見解の不整合から、東洋大本と紀州家本帯木巻とを同一視することには慎重となるべきとした。

けれども、紀州家本を別本とする諸氏の見解は、全巻を概括してのものであることに注意を払うべきであろう。これも巻ごとに見るならば、自ずとまた異なつた所見が得られるはずであるからである。

実際、山岸は、紀州家本の本文について、次のようにも言

っている。

伝阿仏尼筆の本文は、総角卷・早蕨卷及び宿木卷の前半の如きに、河内本や湖月抄本と極めて大きな異同持つ外、略々松風卷以下は、相違の程度に多少の差はあるが、大体は湖月抄本に極めて親近な関係に立ち、一致するが如き部分を多く持つて居る。唯、帚木卷・榊卷を除けば、桐壺卷以下、明石卷・霽標卷の如き辺までは、多少顕著な相違を持つ本文である。

〔開題〕

これによるならば、紀州家本帚木、賢木の二卷は、湖月抄本すなわち青表紙本系の本文に極めて近い本文であった、ということになる。とすれば、東洋大本は、「きわめて純度の高い青表紙本系統である」とする石田の見解に矛盾するものではなくなる。東洋大本が紀州家本帚木卷である蓋然性はむしろ高いと言うべきであろう。

以上見てきたように、大内氏が、東洋大本の本文をめぐって呈した疑義は、いずれも東洋大本を紀州家本帚木卷と同定することへの否定的根拠とはならないであろう。

東洋大本は紀州家本帚木卷であると、ひとまず判断してよいものと考ええる。

四、東洋大本の書誌と筆蹟

東洋大本を書誌や筆蹟の観点から見たときは、如何であるうか。

近時、久保木秀夫氏は、『源氏物語』紀州徳川家旧蔵本の片鱗（『汲古』第七四号、平成三十年十二月。以下、「片鱗」）において、植松安「源氏物語の書誌」に紀州家本の書誌が載ることを紹介した。

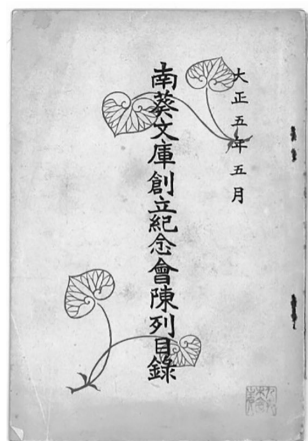
植松論文に掲出される、紀州家本の書誌は次の通り。

源氏物語 全部 六半本 添紙二、安嘉門院四條局号阿

仏真筆。は、き、玉かつら、まき柱、冷泉祖為相卿。

うめかえ一帖者、二條家為親卿。於外題青蓮院宮尊朝親王芳筆。寔可謂至宝也。応嚴命誌之耳。（徳川頼貞氏）

その名が記されているところを見ると、この書誌は、徳川頼貞（明暦二
十九
二八
九三
年）から提供されたものである。徳川頼貞は、紀州家十六代当主。無類の音楽愛好家として知られ、「音楽の殿様」と呼ばれた。紀州家本が売立に出された、昭和二年四月の「紀州徳川家蔵品展観」は、頼貞の時代に開かれている。⁽¹²⁾



【写真2】『南葵文庫創立紀念會陳列目錄』（大正5年5月）

「徳川頼貞氏」と注記される以外に、この書誌の情報源は記されていない。しかし、植松論文より溯ること九年、大正五年五月発行の『南葵文庫創立紀念會陳列目錄』【写真2】にも、同様の書誌が載る。

阿仏尼、冷泉為相、二条為親筆

静蓮院宮尊朝法親王外題 「源氏物語」 五十四冊

書篋 草木花卉蒔絵 抽出梨子地

具体的な巻名とその筆者までは記さないが、本文筆者を阿仏尼（貞応元年〔一二三〇年〕？、冷泉為相（弘長三〔二二六六〕年）、二条為親（鎌倉時代末期、暦応四時代〔三四二〕年）、外題筆者を尊朝法親王（天文二〔一五五二〕年、慶長二〔一五九七〕年）とするところ、植松論文の書誌に同じい。¹³⁾（『陳列目錄』掲出の

書誌と、植松論文掲出の書誌には、共通の資料があったのではないか。『陳列目錄』掲出の書誌は、恐らくそれを簡略化したものであろう。）

植松論文所引の書誌は、初めに本文筆者、次に外題筆者の名を書き、「寔可謂至宝也。応厳命誌之耳」という評言を以て結ぶ書式をとっている。その書式からすれば、それはもと古筆見の折紙の類に拠ったものではないかと考えられる。

例えば、尊経閣文庫蔵「柏木」に附された寛永四年古筆了佐の折紙（太田晶二郎「尊経閣文庫蔵源氏物語（青表紙本）解題」、『太田晶二郎著作集 第四冊』所収に拠る）。

源氏青表紙之内／柏木卷一冊者、京極／黄門定家卿御眞跡／無紛者也。但、付墨／紙數、五拾壹枚在之也。

／奥之勘物一面餘之／筆者、可三押知一也。／

外題・引哥六首、／後柏原院御震筆、／以二彼は、可レ謂三至寶一者也。愚也之添狀／テ折リ雖三憚多一、依二御所望レ證レ之已而。

初めに本文筆者について記し（「京極黄門定家卿御眞跡無紛者也」）、続いて「奥之勘物」の筆者、そして外題筆者にまで言い及び（「後柏原院御震筆」）、評（「以二彼は、可レ謂三至寶一者也」）を下して、最後に謙辞（「愚也之添狀／テ折リ雖三憚多一」）

（「京極黄門定家卿御眞跡無紛者也」）、続いて「奥之勘物」の筆者、そして外題筆者にまで言い及び（「後柏原院御震筆」）、評（「以二彼は、可レ謂三至寶一者也」）を下して、最後に謙辞（「愚也之添狀／テ折リ雖三憚多一」）

多^二、依^レ御所望^一證^レ之已^マ而^一」を以て結ぶ。これは、植松論文に載る書誌の書式に一致する。

あるいは、古筆見以外の鑑定書。

例えば、大澤本『源氏物語』についての前田香雪の鑑定書。伊井春樹他『幻の写本・大澤本源氏物語』掲載の写真によれば、「…夢の浮橋 慶運法印／以上／外題 前関白近衛信尹公／外題絵 狩野山楽／右各筆々蹟無疑美ニ可謂天下至宝也、因茲ニ證之／明治丁未臘月 前田香雪印」（『錦上花』）とある。植松論文に載る書誌や尊経閣文庫蔵「柏木」に附く折紙と同様の書式で書かれている。

この鑑定書を記した前田香雪（天保十二（一八四一）年～）は、本名夏繁、明治八年、「平仮名絵入新聞」の記者となり、後に小説家に転身した人物で、古美術の鑑識にもすぐれていたように、帝室博物館、古社寺保存会などの委員を経て、明治二十五年には東京美術学校教授に就任。古筆にも精通していたという（同書）。

紀州家本にも元々、尊経閣文庫蔵「柏木」や大澤本のように、古筆見、あるいは古筆に精通した人物による折紙が附されており、そこに記された情報が徳川頼貞から植松に提供されたのではないか。とすれば、これらは紀州家においてそれ

なりに古く伝えられてきた情報のように思われる。

その書誌によれば、紀州家本は、本文が主として「阿仏真筆」⁽¹⁴⁾、帚木、玉鬘、真木柱の三帖が冷泉為相筆、梅枝一帖が二条為親筆とされる。⁽¹⁵⁾ 紀州家本は、「阿仏真筆」一筆の揃本ではなく、複数人の手に成る寄合書であったのである。⁽¹⁶⁾ また書誌には、外題の筆者として、尊朝法親王の名が記されている。

尊朝法親王は、伏見宮邦輔親王（永祿十六（一七三三）年）の王子で、正親町天皇（文祿十四（一六二七）年）の猶子（『華頂要略』巻第十三）。紀州家本を紀州家に齎した伏見宮家の王女、安宮照子の大叔父にあたる人物である。能筆と謳われ、尊朝流の創始者として知られる。

青蓮院の寺誌である『華頂要略』には、尊朝法親王が、人に乞われてしばしば『源氏物語』を書写していたことが記されている。

同十六日、依^二大和宰相所望^一、染^レ筆^二伊勢物語一部、鈴虫卷等^一。以^レ使志摩、遣^二郡山一庵方^一。廿一日、礼状到来。（天正十四（一五八六）年八月十六日条）

同廿七日、依^二関白秀吉公命^一、清書^二源氏物語若菜下卷^一

進^レ之。(同十七「一五八九」年二月廿七日条)

同十七日、被^レ染^二宸筆^一。安倍晴明自筆地震之占文下賜^二之^一。

御文云、

尊書祝着申候。仍夢浮橋一冊慥請取申候。就者地震之占文染^二愚筆^一候而進候。隙入候而一筆如^レ此

閏七月十七日

御花押

青蓮院殿

(文祿五「一五九六」年七月十七日条)

「鈴虫巻」「若菜下巻」「夢浮橋一冊」と、本文の書写が記録されている。当然、外題の揮毫を依頼されることもあったであらう。

東洋大本外題の筆蹟は、尊朝法親王のものと云えるであらうか。

東洋大本の外題と、『尊朝法親王書』(元祿四「一六九一」年四月刊、『往来物大系 十三』所収)の中から、「は」、「き」「木」の字を集字して復原したものとを並べたのが、『写真3』である。両者殆ど同筆と言つてよいほどに酷似する。「は」、「は」は同筆と見てよいであらう。「き」も東洋大本外

題の筆蹟に比して線が太く感じられるが、三筆目の右斜め下に貫く線が二筆目のみを貫いて四筆目に続くなど、運筆は同じである。「木」は少しく異なる印象もあるが、別筆と言うほどに異なるわけではない。東洋大本外題は、尊朝法親王筆と見てよいものではないか。⁽¹⁷⁾『尊朝法親王書』の筆蹟は、『尊朝親王御真跡詩歌』(奈良教育大学資料館蔵。安永五「一七七六」年十一月刊)の筆蹟とも殆ど同筆である。東洋大本の外題が尊朝法親王真蹟である蓋然性は極めて高い。

尊朝法親王が伏見宮家の出であったことを考え合わせると、紀州家本が伏見宮家にあつたときに、現在の装幀、すなわち東洋大本の装幀に改められ、尊朝法親王が外題を揮毫したものと考えられよう。

『源氏物語』を複数人で書写し、その写本を製本する際、高貴で学識の高い人物が全帖の外題を揮毫する例は、多くあつたとされる。

『源氏物語』は五四帖と大部であるために、書物の商品化と量産化が進み、文字の上手い職人的な書写者が一人で全帖を担当することが多くなった江戸時代を除いて、室町時代以前では一筆で書写されることは稀で、複数の人物によって分担書写されることが普通のことであつた。

そのような場合には、清書後の製本に際して、統一感を持たせるために、表紙を揃えるのは勿論のこととして、一人の人物が全帖の外題を記すことも多かったのである。その際の外題を担当する人物は、本文の書写をも分担している全体の取りまとめ役のような者か、本文部分には関与していない、身分や学識が高い者であることが多かった。

(佐々木孝浩「飯沼山圓福寺蔵 源氏物語「まほろし」帖

—解題・影印・翻刻—、

『斯道文庫論集』第五十三輯、平成三十一年二月)



【写真3】 右 東洋大本外題
左 『尊朝法親王書』より
集字したもの

紀州家本も、伝阿仏尼筆、伝為相筆、伝為親筆と、「複数の人物によって分担書写され」た寄合書であった。そのため現在の装幀に改められた際、「統一感を持たせるために」、「身分や学識が高い」尊朝法親王が全帖の外題を揮毫したものと考えられる¹⁹⁾。(但し、それは明暦三(一六五七)年の安宮照子降嫁の折ではない。なぜなら尊朝法親王は慶長二(一五九七)年に遷化。外題の揮毫はそれ以前のこととなる。)

とすれば、紀州家に伝えられた書誌情報と、東洋大本外題の筆者とが符合することとなる。この外題が、まさしく尊朝法親王筆と見られることは、東洋大本が紀州家本帯木巻なることを裏付ける有力な証左となり得るであろう。

続いて、本文の筆蹟について。植松論文所引の書誌には、紀州家本帯木巻の筆者として、冷泉為相の名が記されているが、東洋大本の筆蹟を、為相筆と見てよいだろうか。

為相真筆か否かは別として、世に書風のよく似た一類の筆蹟が為相筆とされている。試みにこれらと、東洋大本の筆蹟とを比較してみる。東洋大本の筆蹟と『古筆学大成 二四』所載の伝為相筆とされる「源氏物語切」図版一九二(青表紙本系明石巻)、一九三(河内本系関屋巻)、一九四(河内本系総合巻)、一九六(青表紙本系手習巻)より抜き出した字と

を比較したものが、【写真4】である。

これらを見るに、東洋大本の筆蹟は、伝為相筆とされている筆蹟に比して、全体的に似た書風であることがわかる。⁽¹⁹⁾丸みを帯びた「乃」の形などは、特に似るものもある。主観に依るところ無しとしないが、東洋大本の筆蹟は伝為相筆とされるものと大むね書風を同じくするものと思われる。東洋大本を伝為相筆の一種とすれば、これも紀州家本の書誌情報と符合することとなる。⁽²⁰⁾

本文の筆蹟も、植松論文に載る紀州家本帯木巻の書誌に合致する。外題筆者、本文筆者、いずれの点においても東洋大本を、紀州家本帯木巻と見てよいであろう。

また幸いなことに、紀州家本には須磨巻の写真が残されている。久保木氏は「片鱗」において、『東京日日新聞』大正十五年五月二十四日朝刊七面に掲載された、高本文談「紀州家の図書整理から世に出た貴重な文献」⁽²¹⁾と、それに載る紀州家本須磨巻の書影【写真5】を紹介した。久保木氏は、「紀州家旧蔵本は基本的には伝阿仏尼筆、ただし四帖分は異なっており、ちょうど帯木巻は伝為相筆とされていたという。とするならば、書影の知られた須磨巻は伝阿仏尼筆だったことになるので、帯木巻とは別筆となっていて然るべきである」



【写真4】上段 東洋大本

下段 伝為相筆（『古筆学大成 24』より）。

左から、「源氏物語切」図版194、194、193、192、196、192)



【写真5】 紀州家本須磨卷（「毎日新聞」 検索D
B「毎索」より）

と言う。しかし久保木氏は、東洋大本の筆蹟と紀州家本須磨のそれとを比較して、「行間の取り方といった書式はほぼ同等、かつ筆蹟も、実際には同筆か、そうでなくても同一圈内の書写者同士による相当の類筆かと、論者としては判断されたと⁽²²⁾している。

紀州家本須磨巻の書影を見るに、行数も東洋大本に同じ十行、一行あたりの字数も東洋大本と殆ど同じであり「書式は

ほぼ同等」。筆蹟も、同筆とは認められないものの、帚木巻のそれと「相当の類筆」であることがわかる。

久保木氏の指摘するように、紀州家本須磨巻と帚木巻の筆蹟とが「同筆か、そうでなくても同一圈内の書写者同士による相当の類筆か」とすると、このことは紀州家本の成立に一つの推測を与えるであろう。すなわち、紀州家本は様々な写本を取り合わせた、いわゆる取り合わせ本ではなくて、一時期に組織的に作成された揃本であつた蓋然性が考えられる。

尾州家河内本『源氏物語』についての次の考察は、紀州家本についても参考となるのではないか。

このように尾州家本（引用者注 尾州家河内本）の筆蹟は、多人数のものではあるのだが、その殆どが「後京極流」という書流・書風に含めて考えられる程の共通性を有しているのである。このことから判るのは、「尾州家本」は寄合書であつても、意図的に多人数の筆蹟を集めたものとは異なり、書風に親近性を有する集団の中で集中的に書写されたものであろうということである。

（佐々木孝浩「尾州家本源氏物語の書誌学的再考察」、

『文学・語学』一九八巻、平成二十二年十一月）

植松論文所引の書誌によれば、紀州家本の殆どの巻は、伝阿

仏尼筆とされる。果たしてそれが一筆であつたかどうか、今は確認する術がないが、そう極められているからには、その筆蹟は、一筆と判断され得るほどに似たものであつたであろう。伝為相筆という巻々についても同様。これらも似た筆蹟のものであつたであろう。そしてまた、久保木氏の言うように、その伝阿仏尼筆も伝為相筆も類筆と判断されるものであつた。したがって紀州家本は全体として、「同一圈内の書写者」によるものと考えられる。(それ故に両者は、阿仏尼と血縁的にも同一圈内の、子の為相筆と極められたのである⁽²³⁾。)とすると、紀州家本もまた尾州家本のように、「意図的に多人数の筆蹟を集めたもの」ではなく、「書風に親近性を有する集団の中で集中的に書写されたものであろう」ことが推測されてくる。

このことは、紀州家本の成立を考える上で、重要な視点となるであろう。⁽²⁴⁾

なお、紀州家本は屢々、「伝阿仏尼筆本」と呼ばれる。紀州家本の殆どの巻が阿仏尼筆とされているからであろうが、あたかも全帖阿仏尼一筆に成る本であるかのような呼称である。

山岸も紀州家本の筆蹟について、『開題』に「大体、全部

一筆の古写本と称せられて居る」と書いている。(恐らく紀州家本を実見した武田祐吉からの聞き伝えであろう。)山岸は、諸本の名を一般に、「陽明文庫本」「蓬左文庫本」「三条西家旧蔵本」等のように、所蔵者名を冠して書くのだが、紀州家本については一貫して「伝阿仏尼筆本」と書いている。「紀州家旧蔵本」としてもよいところをあえて「伝阿仏尼筆本」とするのは、紀州家本について、伝阿仏尼一筆に成る『源氏物語』であるという理解が強かつたからではないか。

しかし、伝阿仏尼筆というのは、伝為相筆、伝為親筆と共に、古筆見によつて極められた紀州家本の本文の伝承筆者名のひとつに過ぎない。それを「伝阿仏尼筆本」と呼ぶことは要らぬ誤解を招く恐れがある。むしろ実情を反映すれば、「阿仏尼等筆」と呼ぶのが適當であろう。

だが、紀州家本が「伝阿仏尼筆本」と呼ばれるようになったことも不思議ではない。青表紙本を校訂した定家の息為家の側室であり、且つ『源氏物語』を始めとした古典に通じ、『十六夜日記』や『うたたね』を記した阿仏尼の名に人々は惹かれたのではないか。写本が佚亡し、紀州家本全帖の筆蹟を確認することができなかったこともそれを助長したかもしれない。

しかし、以上述べたように、紀州家本が伝阿仏尼一筆になる揃本ではなく、伝為相筆、伝為親筆の帖をも持つ寄合書の『源氏物語』であつたことは再認識しておくべきであらう。⁽²⁵⁾

五、結語

先行研究に指摘される問題点、未だ検証の足らぬ点についてあらためて検証し、私見を述べた。伝来、本文、書誌、筆蹟、いずれの観点からしても、東洋大本を紀州家本帯木巻と断定するに足る結果が得られたように思う。

モディのもとにあった紀州家本数帖は、神戸大空襲に遭い焼失してしまった蓋然性が高く、残存は望めない。紀州家本の本文を書き留めた校合本、すなわち「武田校本」と「山岸校本」もまた、所在不明のままである。そうした現状において、帯木巻のみとは言え、紀州家本の本文、そして書物としてのその姿を伝える東洋大本は、紀州家本の研究に資するところ大きく、まさしく珍重すべき一帖であると言えよう。

注

(1) 山岸徳平を始め、島津久基、三谷榮一が、著書や論文において、紀州家本を「伝阿仏尼筆本」と呼んでいる。

(2)

池田亀鑑は、随筆「本のゆくへ」(『花を折る』所収、初出は『日本経済新聞』昭和三十年八月二十六日号)において、紀州家本に関して次のように回想している。

戦争前、源氏物語の古写本を探して全国を歩いてゐたころ、今日でも忘れられないことが一つある。それは、ある道具屋の世話で一人の手に渡つた源氏物語に関する道具屋の世話である。その古写本は、鎌倉時代の中ごろ、当時の学者や歌人達が分担して書いたもので、非常にめづらしい本文系統のものであつた。買ひ主の外人は、実は蒔絵の箱の方が気に入つて買つたのださうだが、よくとしてはもちろん本の方が問題だつた。何とかしてその本文をしらべて置きたいと、あらゆる誠意と手段をつくして、道具屋のいふ通り何べんとなく懇請の手紙を出したのだが、当人は決してみづから返事はよこさなかつた。

(3)

その後、池田は紀州家本実見の機会を得て、神戸のオリエンタル・ホテルに滞在する「買ひ主の外人」、すなわち石田紹介に言う「英人モード氏」のもとを訪ねたものの、約束の時間になつて体調不良を理由に閲覧を断られたとのこと。この随筆には、その時の憤懣やる方ない、池田の心境が綴られている。

「武田校本」の詳細については、三谷榮一が伊藤鉄也氏に証言するところである。伊藤氏は、三谷の証言の概要を次のように記している。

神戸のホテルにモディ氏が写本を蔵していたので、佐佐木信綱氏と武田祐吉氏とが足を運ばれた。佐佐木氏は当然、歌論書を見ることに主眼を置かれていたようだが、問題の伝阿仏尼筆本源氏物語については、武田氏が、持参しておられた金子元臣氏の『定本源氏物語新解』(注略)に書き込まれたそうである。その武田氏

の校訂本のことを山岸先生のお耳に入れ、武田氏の御自宅まで御一緒されたのが、三谷氏であったそうである。他にも誰か、その武田氏校訂本を転写した人がいたはずであるが、今は不明とのことであった。戦災で焼けてしまっているのであろうか。山岸先生が写された御本も不明とのこと。私も、数年前に山岸先生におたずねしたが、武田氏の校訂本を写し取られた御記憶はありであったが、その本がどうなっているかについては、ついにお話に出なかった。

〔若紫〕の別本——中山家本の位相——〔付記〕、『源氏物語受容論序説——別本・古注釈・折口信夫——』所収、初出は『国書逸文研究』第五巻、昭和五十五年八月）ここで三谷は、山岸や「他にも誰か」が「武田氏の校訂本」、すなわち「武田校本」を写していたことも証言している。「山岸先生が写された御本」とは、「山岸校本」のことだと思われる。但しそれが山岸自筆に成るものであったのか、山岸が誰かに指示して写させたものであったのかは定かではない。

- (4) 「武田校本」について、伊藤氏が、武田の蔵書を受け入れた國學院大學図書館に調査を依頼したが、発見に至らなかったと言う（注3前掲論文〔付記〕）。「山岸校本」についても、上原作和氏が実践女子大学の山岸文庫を調査したが、わずかなメモが書き込まれている「新解」三巻があるのみであったと言う（山岸徳平「源氏物語の諸本の研究」解説、陣野英則、上原作和編「テーマで読む源氏物語論2 本文史学の展開 言葉をめぐる精査」所収。河内修、古田正幸解説・翻刻「阿仏尼本は、き木」より転載）。

- (6) 「伝阿仏尼筆は大阪の役後、家康から紀州徳川家に譲渡せられた本である」（山岸徳平〔高松宮本解説〕、源氏物語〔解説〕

臨川書店、昭和五十年。以下、『高松宮本解説』）。

- (7) 安宮照子の紀州家降嫁の日について、紀州家の正史『南紀徳川史』に、「明暦三年丁酉霜月廿六日、伏見二品貞清親王ノ御ムスメ安宮、紀伊宰相光貞卿へ御婚札ニテ当国山口ヨリ儀式ニテ入ラセ給フ」（堀内信編『南紀徳川史』）と記されている。伏見宮家の『貞清親王実録』にも、同様の記録がある。これらに上掛け紙に墨書された来歴は一致する。安宮照子が降嫁の折に持参した本とすると、紀州家本は嫁入り本であったということになる。たしかに紀州家本も、その例に漏れず、絢爛豪華な時絵筆箋に収められていた「写真1」。

- (8) 上原作和「伝阿仏尼等筆本「源氏物語」と本文学藝史——紀州徳川家旧蔵本は駿河御譲本にあらざるの論——」（『国文学 解釈と鑑賞』第七三巻第五号、平成二十年五月）、河内修注5前掲書「解説」。

- (9) 大内氏は、「高松宮本解説」では、紀州家本が「大正十四年秋頃」紀州家よりモデイの有に帰したとあるのに、「開題」では、「大正十五年夏秋の候」にもまだ紀州家にあつたとする矛盾について、「いずれも記憶・回想による文章と思われるので、一、二年の間違いはやむを得ないのかもしれない」としている。

また、武田祐吉が紀州家本を校合した時期について、注3の三谷証言では、モデイの有に帰した後としているのに対して、山岸「開題」は、「紀州徳川家に就いて校合を完了せられた」（「凡例」と、紀州家の蔵であった時期であるとしている。両氏の証言の齟齬も、記憶違いに因るものであろうか。

- (10) 山岸は、紀州家本の本文に強い関心を持ち、「一般の人々の研究上参考に供し得らるれば、更に裨益せられる点が多からうと思ふ」（「開題」）として、自身の論文や著書に

【表1】

『開題』		A	B	C	『新解』
1. 故左の大きい殿			故左の大臣殿	故右の大きい殿	故左大臣殿 こまたいしどの
2. 東宮		宮	春宮	春宮	春宮 とくこう
3. 人さき参り給ひにしかば			人よりさきに参り給ひにしかば	人より先に参り給ひにしかば	人より先に参り給ひにしかば
4. 年経給ふに			年頃、経給ふに	年頃、経給ふに	年経給ふに
5. 女宮一所		女一所			女宮一所
6. 人におされにたる	人におされ奉りに	人におされ奉りにたる	人におされ奉りにたる	人におされ奉りにたる	人に壓され奉りぬる お
7. 御かたちなど	御かたちなども	御かたちなども	御かたちなども	御かたちなども	御容貌も おんかたち
8. 世に又なきものに	世に又なき様に				世に類なき様に たぐひさま
9. もて思ひ聞えさせ給ふ		もて聞えさせ給ふ			もてかしづき聞えさせ給ふに
10. 御いきはひいかめしう	御勢のいかめしう				御勢 厳めしかりし おいきはひ

度々紀州家本の本文を引用していた。だが、山岸が紀州家本の本文として引用する本文には、不審とすべき点がある。

山岸は、紀州家本の中でも殊に宿木巻の冒頭部分を、『開題』の他、
A. 「河内本源語の価値」(『文学』第五卷第十号、昭和十二年十月)
B. 「源氏物語諸本の研究」(『国文学 解釈と教材の研究』

第三卷第五号、昭和三十三年四月)
C. 「源氏物語の諸本」(山岸徳平、岡一男監修『源氏物語 講座 八巻』有精堂、昭和五十年所収)
に引いている。ところが同じ箇所でありながら、これら四本に引かれる紀州家本宿木巻の本文には、異同が存するのである。

試みに『開題』所引本文を底本とし、に残る三本を対校し、その異同を示す【表1】。『開題』の「凡例」に、

紀州家本の引用について、「武田校本」に拠ったことが記されていることから、該当箇所『「新解」の本文も掲出する。空欄は「開題」と同一の本文であることを示し、斜線はその部分の引用が無いことを示す。なお表記の異同は、引用の際、山岸が適宜改めた蓋然性があるので省く。

その頃藤壺と聞ゆるは、¹故左の太い殿の女御なりけり。まだ²東宮と聞えし時より、³人さき参り給ひなりしかば、むつかしうあはれるものにおぼされ給ひて4年経給ふに、中宮の宮たちは、しかおとなび給ひぬるを、只⁵女宮一所、持ち奉り給へる、わがいと口惜しう、⁶人におされにたるうればしさ慰むばかり、いかでこの宮をもてなし聞えむと思しはげみて、今めかしう故々しきさまにもてなしかしづき聞え給ふ。⁷御かたちなど、をかしうおはしければ、みかどもいとらうたきものに思ひ聞え給へり。女一宮を、⁸世に又なきものに、⁹もて思ひ聞えさせ給ふ。おほん覚えの、こよなきうち¹⁰の御有様は劣らず。父おと¹¹の10御いきほひいかめしう、ふりがたかりける名残に、心もとなからず、侍ふ人々の有様なども、たゆみなくをかしう、好ましげに、時々につつと、のへ給へり。

十四になり給ふ年、御裳着のいそぎを、春よりうちはじめて、いみじう思し設く。古の宝物、世々の伝わり物を、この折にとさがし出で営み給ふに、女御、夏頃物のけに悩み給ひて、はかなく失せ給ひぬ。言ふ甲斐なく口惜しき事を、上にも思し歎く。うちわたりの人、惜しみ悲しまぬ人なく忍び奉る。なつかしう、今めかしう、情ある心ざまにぞおはしければ、こよなうさう¹²しうもあるべきかなと、さしもあるまじき、おほやけ人などまでも歎きあへり。

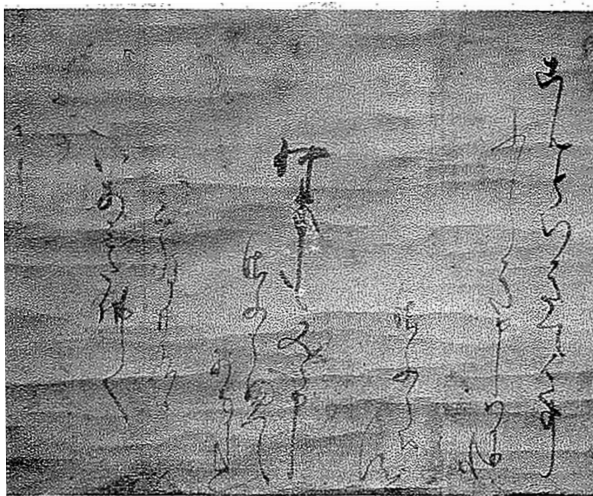
一見して異同の多いことがわかる。3、6、7、8、9の

ように、単なる校合漏れと考えられるものもあれば、1、2、4、5、10のように、その原因が判然としない異同もある。例えば1を見ると、他がすべて「左」となっているにもかかわらず、Cのみが「右」となっている。この他2、4、5、10は、「新解」と「開題」とが同じ本文であるのに、一本で一字欠落(2、5)、あるいは逆に、一本で一字補入(4、10)という、単なる校合漏れではないと思われる異同もある。

(11) 山岸自身が引用する紀州家本の本文自体に、それが一樣ではないという問題があるのである。注意を要することであろう。

(12) 藤田徳太郎「源氏物語綱要」には、「紀州徳川家旧蔵の伝阿仏尼筆写本があるが、これまた耕雲本かと言はれる」とある。山岸、島津、池田の三氏とは、また異なる見解である。

「日清・日露戦争の戦功によって華族が増加する一方で、資本主義経済の進展とともに、華族間の経済格差が広がっていく。とりわけ資産家と言われた武家華族たちのなかにも、経済的苦境を乗り越えるために、先祖伝来の「家宝」を売却する者が増えはじめ、なかには本邸や爵位まで手放す者も現れてくる。こうしたケースは、第一次大戦勃発による「成金」のような新しい購入者の登場で明らかになっていくが、それ以降、とくに一九二〇年代(大正末)から三〇年代(昭和初期)にかけて、名家の没落の象徴として話題にもなっていく。」「紀州徳川侯爵家は、華美な散財に加えて、一九二三(大正十二)年の関東大震災で被害を受け、二五年の当主頼倫逝去による相続税で資産を減らした」(小田部雄次「華族 近代日本貴族の虚像と実像」)。「展観」開催の背景には、このような事情があったものと推察される。



【写真6】「阿仏尼真蹟」（小川寿一『大通寺叢書第四輯 阿仏尼と大通寺』より）

(13)

また『陳列目録』には、箱についても「書篋 草木花卉蒔絵 抽出梨子地」と記されているが、これは『展観目録』に載る「梨子地源氏蒔絵歌書筆筒」とも矛盾しない。

(14)

「今のところ現存資料で阿仏真筆と確定できるものはないが（田淵句美子『人物叢書 阿仏尼』）、阿仏尼の菩提寺である京都の大通寺に、「阿仏尼真蹟」とされる消息文を

蔵する。小川寿一『大通寺叢書第四輯 阿仏尼と大通寺』に、その書影（写真6）が載る。写真を見ると、「阿佛」の「阿」の字は擦れて消えたのであろうか、不鮮明ではあるが、たしかに「佛」の署名があることがわかる。また同書には、「この真蹟には寛保辛酉元年八月の古筆養心即ち神田道伴の極札が附してありますが、又別に阿仏尼の後である冷泉為村卿が次の如きを懷紙に誌されてあます」として、冷泉為村の折紙が掲出されている。

洛西大通寺々寶之一幅

假名文 八行

端 こんといきて返事

奥 いあみた佛へ

右阿佛尼公眞蹟無疑候

寺門相傳永々可有秘藏者也

寛延四年初夏

冷泉中納言（花押）

菩提寺に蔵され署名もある消息であれば、真筆である蓋然性は大いに考えられるが、他に「阿仏真筆と確定できるもの」が無い現在、その当否を定めることはできない。

この他、「あふつ」の署名のある、紙背に「明月記」らしい記録を持つ仮名消息を寓目したことがあるが、これは文字が少し左に傾き、縦の線を意識した筆致、仮名の崩し方などは大通寺蔵の消息に似たものであった。

因みにこれらの筆蹟と後掲【写真5】の紀州家本須磨巻の筆蹟とを較べると、別筆であることは分明である。植松論文所引の書誌に「阿仏真筆」とあるが、それは「鄭重に何々真蹟と書くを本義とする」（森繁夫『古筆鑑定と極印』）古筆鑑定における通例によって書かれたものであろう。阿仏尼の真筆については、なお精査の待たれるところである。



【写真7】「梨子地源氏蒔絵歌書箆筒」
表書拡大

(15)

二章に述べたように、久保木氏は、「展観」時の紀州家本についての高木の証言、「某氏（今は博士）がされてゐたが、其校訂中に売却されることになったので欠本を明かにして入札に出してしまつた」（『賜答書屋隨筆』）に言う欠本の明示ということをも、「展観目録」の注記「（伝阿仏尼補筆数冊）在中」と考え、「補筆数冊」という文言については、「その時読えられた」「補写本」と考えたようである。だが、この「補筆数冊」とは、むしろ植松論文所引の書誌や『陳列目録』に言われる伝為相筆の帚木、玉鬘、真木柱、そして伝為親筆の梅枝の四帖を言つたものと考ええる。紀州家本は、伝阿仏尼筆と喧伝された「源氏物語」であつたために、伝阿仏尼筆とされる筆蹟とは別筆の巻を、「補筆数冊」と記したのではないだろうか。

(16)

「鎌倉時代の中ごろ、当時の学者や文人達が分担して書き

(17)

た」（注2前掲隨筆）という池田の証言は結果として正しかったということになる。しかし、伝二条為親筆とされる梅枝巻については、後補された蓋然性も考えられる。二条為親は、鎌倉時代末期・南北朝時代の人。実際、伝為親筆とされる「続千載和歌集」巻第四断簡（島田切）（古筆手鑑「藻塩草」）や、「新古今和歌集切」（一）（古筆字大成 一〇）図版三六〇、「続後撰和歌集切」（古筆字大成 一一）図版一三七、「島田本続千載和歌集」（同図版三四七・三六七）、「続千載和歌集切」（一）（同図版三六八）、「同上」（二）（同図版三六九）などは、いずれも南北朝時代のものでとされておられ、伝阿仏尼筆、伝為相筆とされるものとは書風を異にしている。

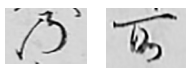
(18)

上原作和「光源氏物語傳來史」に「伝阿仏尼等筆本『源氏物語』傳來史」章末の図版に、「箆筒表書」と「はき木」題簽は同筆であろう」としているが、箆筒表書の筆蹟は定家流に近いものであり【写真7】、題簽と同筆とは言い難い。

(19)

陽明文庫本「源氏物語」五十四帖のうち「鎌倉時代中期の書写とみられている三十四帖」の「外題の筆蹟は同筆と思われるが、東屋・浮舟二帖は別筆かもしれない。本文の筆蹟とは別筆と思われる。ある時期、まとめて外題を書いたものであろう」（阿部秋生「陽明叢書国書篇」第十六輯「源氏物語一 翻刻・解説」とされている。但し、外題の筆者の詳細は不明。切や断簡のみならず、写本においても伝為相筆とされるものは夥しく存在する。例えば天理図書館蔵伝為相筆末摘花巻（四葉）善本叢書「源氏物語諸本集一」所収）を見ると、東洋大本とは別筆であるが、同じ書流に属すると思われる書風であることが確認できる。

(20) 東洋大本が、為相の真筆である蓋然性はあるのであろうか。為相真筆とされるものに、冷泉家蔵の『文保百首』や『播磨国越部莊文書』のうちのひとつ「嘉暦三年七月十二日為相讓狀」(『冷泉家時雨亭叢書』51「冷泉家古文書」所収)がある。これらの筆蹟と東洋大本の筆蹟とを比較すると【写真8】、書風は似ているが、真蹟の方が太い線



【写真8】 上段 東洋大本
下段 為相真筆 (『冷泉家の至宝展』より。
左から、『文保百首』『嘉暦三年七月十二日
為相讓狀』)

で定家の筆蹟に近い筆致であるように思われる。東洋大本の筆蹟は為相真筆に運筆など通じる点も多くあるが、為相真筆ではないように見受けられる。

(21) この記事において高木は、紀州家本の伝来について、「これは家康が駿府にゐられた頃から紀州家に伝はつたもので、鎌倉時代に阿仏尼の手写したものと称せられてゐるものである」と言う。紀州家本は伏見宮家より齎された本であるとする証言に矛盾するものである。そのような伝承もあつたのであろうか。

(22) 尤も、伝阿仏尼筆、伝為相筆とされるものは「同一圈内の書写者同士による相当の類筆」であつたようである。『明翰鈔』所収の書流系譜「流儀集」(小松茂美「日本書流全史」所収)には、「法性寺流」のひとつに、「阿仏四条局 為相二似」と記されている。現に、『古筆学大成二二三』所載「伝阿仏尼筆 狭衣物語切」図版八一は、古筆了雪によつて阿仏尼筆と極められているものの、為相筆という裏書が存するようである(須藤圭「狭衣物語古筆切の一樣相」、『論究日本文学』九七号、平成二十四年十二月)。

(23) 天理図書館蔵伝源頼政筆柏木巻(鎌倉時代初期写。『天理善本叢書 源氏物語諸本集一』所収)と同図書館蔵伝二条院讃岐筆乙女巻(鎌倉時代中期写。『天理善本叢書 源氏物語諸本集二』所収)とは、「書風が似通い、助詞「も」を「母」とする書き癖も共通している」(源氏物語諸本集一「曾澤太吉「解題」」と、指摘される。源頼政と二条院讃岐は親縁。この二帖は僚卷ではないが、同一圈内の書風で、血縁的にも同一圈内の親子の筆蹟に極められた一例として挙げられよう。

(24) 鎌倉時代中期を下らない書写とされるハーバード大学美術館蔵須磨、蜻蛉二巻、およびそれらの僚卷(国立歴史

民俗博物館蔵・中山家旧蔵鈴虫巻、相愛大学図書館春曙文庫蔵『源氏物語断簡』のうち藤裏葉、橘姫、宿木、手習四巻）がある。（近時、久保木秀夫氏によって、石水博物館蔵早蕨巻が、これらの傍巻であることが指摘された（『源氏物語』巻別本、研究の可能性——石水博物館蔵「早蕨」丁子吹き装飾料紙一帖の紹介を兼ねて——、中古文学会関西西部会編『源氏物語 本文研究の可能性』和泉書院、令和二年所収）。これらは、筆蹟のみならず、法量、装潢（墨流し、吹絵による装飾料紙）、外題（中央上部打ち付け書）等、型式がほぼ一致しており、元々は一具の揃本として組織的に製作されたものであろうとの推測がなされている（上野英二「ハレバト大学 源氏物語須磨巻・蜻蛉巻について（乾）——付 翻印須磨巻——」、『成城國文學論集』第二十五輯、平成九年三月）。

(25) なお、阿仏尼の名を冠した呼び方の初例は、『東京日日新聞』大正十五年五月二十四日朝刊の高木前掲記事における「阿仏本源氏物語」ではないかと思われる。このような呼び方は、近代以降の比較的新しい呼び方なのかもしれない。

〔後記〕 貴重な資料の写真転載を御許可下さった萬祥山大通寺に記して御礼申し上げる。

（なりた・だいち 成城大学大学院博士課程後期）